

## 世界を変えよう基金報告書

### 「学生医療ボランティアの意味と国際協力」

筑波大学 医学群看護学類4年 今泉 有湖

カンボジアの首都プノンペンから車で約一時間半、ウドンという市にある、一年前に日本のNPO団体によって設立された病院で私は一週間医療ボランティアを行った。発展途上国に行くこと、海外ボランティアも初めてで、看護の実習、授業もすべての領域が終わり、ある程度看護に対する知識をつけてから医療ボランティアに行くことをずっと願ってきた私にとって、この経験はとても濃く、改めて医療の現状、ボランティアの意義を考えさせられた。

主に私が病院で行った活動は、掃除、病院周りのゴミ拾い、親の付き添いで来た子どもたちと遊ぶこと、カルテ、手術で使うガーゼの整理、診察補助（体温、血圧測定など）、診察見学であった。特に活動日の初めのほうは、掃除をずっとして、カンボジア人の患者さんとは、コミュニケーションがうまくとれない、看護学生らしいことは何一つできていないことに気が付き、患者さんに貢献できない自分の無力さにすごく落ち込んでいた。こんな思いになることは想像してもいなかったことで、所詮学生ボランティアだから、資格を持っていないから、こんなものなのかな、と忙しそうに生き生きと活動していた医師、看護師、通訳スタッフさんを眺めながら考えていた。早く看護師になって患者さんの役に立ちたい！と悶々としていた。

しかし、診察を見学していた時に日本人でボランティアとして働いている医師、看護師さんから話を聞いたが、毎日多くの患者さんを治療して元気になっていく姿にやりがいは感じるけど、思うようにいかないことも多い、とのこと。例えば、現地人スタッフから良く思われず、患者さんに正しくない知識を広めようとするスタッフがいること、母子の異常を早期発見するために妊婦検診を広めようとした結果、検診に来てくれる人が増えたが、ただ赤ちゃんの性別、写真をもらえればいいと思って来ていて、検診の意味を重要視していない妊婦が大半なこと、など、いろんな現状があり、スタッフは葛藤し、悩みながらも現地の人のためにより良い医療を提供するために考え、いずれはカンボジア人スタッフだけで病院を回していけるよう、活動していた。私はこのように海外での医療ボランティアはやりがいを感じられるだけではなく、大変で、思うようにいかないことがあると、予想していたが、生の声を聞き、改めて国際協力について考えさせられた。

この話を聞き、医療ボランティアで、患者さんの役に立ちたい、とばかり思っていたが、学生ボランティアとして、まずスタッフの方が活動しやすいように貢献しようという姿勢も大切で、それが患者さんの役に立つことにもつながると思った。スタッフは忙しくて掃除ができない時があるので、掃除だって十分役に立つことである。それから私は、掃除に励み、診察見学、補助など自分からできることを見つけて積極的に活動した。現地の人とはイラストが描いてある本でコミュニケーションをとったり、発音を通訳さんに教えてもらい練習

して、患者さんに声掛けも行った。カンボジア人はいつも笑顔で、とても明るく人柄が温かい。日本人にはあまりない、カンボジア人の良いところである。初めは何もできない自分に悶々としていたが、それを知ることも大切で、学生ボランティアとして、病院に貢献できることはある、と感じた。

この一週間はとてもあっという間で、充実した一週間だった。日本の病院では経験できないことを見せていただき、学ぶことができた。国際協力はやりがいばかり感じられるわけではなく、厳しい現状があるが、それを痛感しても、現地の人々の笑顔、元気になっていく姿は心を動かすパワーがある。将来、看護師として国際協力したいという思いがより強くなった。

最後に、忙しい中でもいろいろなことを教えてくださったスタッフの方、ボランティアのきっかけをくれた友人、支援してくださった先生、本当にありがとうございました。